

## 天下の祭り「菊水祭」 屋台・山車巡行の衰退の原因

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



伝馬町の彩色彫刻屋台



慶応3年「日光山大明神祭礼絵巻」増洲寛政

毎年、十月最終土・日曜日は、宇都宮二荒山神社の菊水祭が行われる。菊水祭は、江戸時代の「諸国御祭礼番付」によれば、江戸の山王祭・神田祭、常州の水戸祭、陸奥の仙台祭等とともに東国祭礼の最上位十指にランクされるほどであった。

江戸後期は菊水祭の最盛期で、弘化四(一八四七)年の「日光山大明神祭礼絵巻」によると、祭礼町三十九町のうち三十八町が祭りに参加し、彫刻屋台二十、山車三十、その他芸屋台等三十一、合計八十一種が繰り出したという。

そうした数多くの屋台、山車等も今では、完全な形で残る物は、蓬萊町と伝馬町の彫刻屋台、大黒町の花屋台、本郷町の山車の四台きりで、肝心の菊水祭での巡行も衰退した。江戸時代、宇都宮の町をにぎわした屋台や山車などは、どうしてしまったのだろうか。大いなる疑問である。菊水祭はもともと、二荒山神社

の例大祭である秋山祭の付祭りとして生まれたものである。寛文十二(一六七二)年の春、日野町から火災が発生、風下の曲師町は幸い類焼を免れた。人々は明神様(二荒山神社)のお陰としてその年の暮れの冬渡祭に、御礼のために曲師町、日野町で町内の子どもを唐鬼姿に装わせて手踊り等を神輿に供奉した。翌年の春渡祭には、他の町内からも出し物が出て混雑したので、翌延宝元(一六七三)年から九月の秋山祭の付祭りとして神輿の渡御行列の後に繰り出すようになり、やがて屋台や山車が伴うようになったのである。

弘化四年には三十八町から五十台の屋台・山車が繰り出した菊水祭も明治期に入ると参加する町内の数、繰り出す屋台・山車の数が減った。明治二十三(一八九〇)年には参加町内二十九町、繰り出した屋台・山車の数二十である。昭和九年には参加町十六町、屋台・山車の数十二であり、

これを最後に菊水祭における本格的な屋台・山車の巡行は行われていない。屋台・山車の数が少なくなったのは、第一には宇都宮以外の町に売却されたことによる。例えば大町の日出に鶴の山車が芳賀町祖母井西町へ、新石町屋台が益子町内町へといった具合であり、この他にも売却された山車二台、屋台五台が各地で活躍している。このように各地に屋台・山車が売却された背景には、本祭りである秋山祭が明治期になって衰退し、それに伴って付祭りの菊水祭も衰退したことが、および氏子町内の経済力の低下や菊水祭に対する氏子たちの情熱の衰え等が掲げられる。

こうした菊水祭を取巻く状況に決定的な打撃を与えたのが第二次世界大戦時の宇都宮空襲・戦災による屋台・山車の焼失である。その結果、現在、完全な形で残る屋台・山車は四台となってしまうのである。その上、屋台・山車を所蔵する町では、近年戸数が激減し資金、曳き手に事欠くようになり菊水祭に繰り出すことが困難になってしまった。菊水祭は、神輿の渡御行列のみの寂しい祭りのままである。

幸い本年(平成二十六年)秋の菊水祭には、復元された新石町の火焔太鼓山車をはじめ益子町内町の屋台、芳賀町祖母井西町の山車、その他が行列に加わる。これを機に菊水祭の本格的な屋台・山車の巡行の復活を望む。宇都宮中心市街地活性化のためにも。